オープンコースウェアとオープンエデュケーション

OpenCourseWare and Open Education

宮 川 繁^{※1}
Shigeru MIYAGAWA

1. はじめに

2001年にマサチューセッツ工科大学（MIT）がオープンコースウェア（OpenCourseWare, OCW）を発表してから、教材の一般公開が本格的に始まり、最近では、常識といってもいいほど、大量の教育資料がインターネットなどにより、無償で公開されている。MITでは、現在、2,100以上の科目の教材がOCWサイトに立ち上がっており、講義ノート、宿題、試験のほか、特にビデオレクチャーが増えている。ビル・ゲイツ氏のMITでの演説の中で、OCWにふれ、彼が勉強していると言ったOCWの授業は、物理、数学など、全てビデオレクチャーのコースであった。

2. MIT OCWの背景と経緯

この10年間、OCWと深く関わり、最近では、MITオープンコースウェア・ファカルティ・アドバイザー委員会の委員長を勤めているが、OCWが軌道に乗りはじめて、いくつか特筆すべきことがあった。OCWの概念が2000年の委員会で提案された時、人々がどれくらいアクセスしてくれるかわからなかった。驚いたことに、毎月、100万人以上のユニーク・ユーザーが世界中からOCWを利用してくれている。このうち、約80%が、MITの実際の教材へのアクセスで、他は、翻訳パートナーがMITのコンテンツをスペイン語、ポルトガル語、中国語、またタイ語、ベルシャ語などに翻訳したサイトへのアクセスである（図1）。

この10年間で、合計1億人のユーザーがMIT・OCWサイトを活用してくれたが、一つ気になったのは、サハラ以南アフリカからのアクセスがほとんどないことである。「OCWは人類の為に」と宣言したので、どうかしなければと思い、数年前に、MITの学生を中心にこの問題を取り上げた。調査の結果、インターネットの普及はこれからだが、この地域の国立大学によっては立派なイントラネットが設立されていることがわかった。それで、MITの学生グループは、OCWのコンテンツをハードドライブに落として、それを担いでアフリカに持って行き、大学関係者の指示の下でイン

図1 MIT OCWへのアクセス

トラネットに接続し、ワークショップを行った。私もこの問題を、デジタル・ディバイドの授業で取り上げ、学生たちに、関連したプロジェクトをデザインさせ、プロジェクトの一環としてその実行に必要な資金の申請もさせた。

もともと世界の人たちに活用してもらおう目的で立ち上げたOCWだが、MITにもいくつかの利点がある。教材の電子化を加速させ、教員のIT活用にも拍車をかけた。また、最近、新入生の間でアンケートを行った結果、高校生時代に半分ほどがMIT OCWを見ていたことがわかった。より驚いたのは、そのうち37%がMITを選んだ大きな理由（significant reason）のひとつにOCWを挙げていることである。もちろん最大の理由は、電子工学、バイオなどを勉強したいからであるが、プラスアルファの要因としてOCWがMITを選択する大きな決め手になったことをうれしく思った。

MIT・OCWが始まってから数年後、国際OCWコンソーシアムも立ち上がり、すでに世界の250校の大学がOCWに取り組んでいる。その中で、30近くの大学で形成されている日本OCWコンソーシアム（www.jocw.jp）の活動がOCWの世界で注目され、世界のOCWコミュニティのリーダーとして期待される。JOCWは、初めての国単位でのコンソーシアムであり、JOCWをモデルとして、最近台湾（TOCWC）や韓

2012年5月27日受付

※1 マサチューセッツ工科大学

国（KOCWC）でも同様のコンソーシアムを立ち上げ興味深い活動を行っている。

3. 最近の新たな動き

教材のオープン化で始まった21世紀は、これからどのような動きを見せるであろうか。最近、「オープンエデュケーション」という表現をよく耳にするようになった。2011年に、スタンフォード大学のある教授が、グーグルと組み、人工知能入門のコースをeラーニングで提供し、だれでも自由に登録できると発表したところ、90カ国から16万人の人たちが登録したという。毎週、提出された宿題を機械で採点し、最後まで頑張った学習者には、その授業の先生の名前で修了証が出された。MITも、MITxを発表し、電子工学の授業を打ち上げたところ、12万人の登録者により、ラーナーコミュニティができた。

最近、MITとハーバード大学が同じプラットフォームでeラーニングのコースを無償で提供するedXという組織を両大学の学長が発表した。

教材のオープン化でOCWがスタートし10年後の現在、教材からエデュケーションのオープン化まで進んで来ている。今後、他にどのような新しいアイデアが生まれるかはわからないが、スタンフォード、MIT、ハーバードで行っているオープンエデュケーションの試みは、その一つの具体的な方向性であろう。

.....

著 者 紹 介

宮川 繁

国際基督教大学にて学士号を取得。
アリゾナ州立大学にて言語学の博士課程を修了。
オハイオ州立大学教授を経て、1991年よりマサチューセッツ工科大学教授に就任。
2001年にスタートした「MIT OCW」プロジェクトの中心人物として活躍し、OCW Faculty Advisory Committeeの委員長を務める